

大阪府支援教育研究会LD教育プロジェクト講演会（報告）

平成21年3月7日(土)に、クレオ大阪北で大阪府支援教育研究会LD教育プロジェクト主催の講演会が開催されました。講師には、昨年度に引き続き、岡山大学の佐藤暁（さとる）先生をお招きし、「通常学級における学び合いを支える支援」というテーマでご講演いただきました。約80名の参加者は、先生の豊富な授業研究に基づく支援に関する知見について、熱心に聞き入っておられました。終了後、参加者から「いい話やったなあ！」という声を耳にしました。

<内容>

I. あるアスペルガー症候群と診断を受けた当事者の手紙の要旨から

「学校は、0か100を求める場所だった。するの？しないの？できる？できないの？という感じで・・・。0よりマシな30や40を用意する手立てはないのか！・・・」

「問題なのは、他の子どもたちにどう説明するか？ということです。先生方は、ある程度の理解があっても、クラスの他の子どもたちは、発達障がいをもつ子どもに、どう関わっていいかわかりません・・・」

「あの子の生き生きした表情を見るためには、どうしたらいいのか？どう関わっていくのか？そういう視点が多くの教員に必要ではないかと思うのですが・・・」

今、特別支援教育といえば、発達障がいのある子を検査して、その子をどうするかということの議論がなされがちなのだが、根本は、その子が生き生きとするためにどうしたらよいかを考えたい。そのためには、周囲の子どもたちが、その子にどう関わったらよいかを教えないと、その子は幸せにはなれない。

II. 国語教材「あまんきみこ作 おにたのぼうし」（自閉症の子どもがいる3、4年複式学級）の授業研究を通して、学び合いを支える支援のポイントを語られました。

1. 読むことの大切さ。

国語の授業で、大切なことは読むことである。何度も繰り返し読む中で、分かってくる。読むことを通して、たくさんのことばにさらしてあげることが大切である。

2. ことばは、人に届けるものである。

担任は、「伝えるように、聞かせるように読んでくださいね。」と言う。ことばは、人に届けるものであるということを意識した声かけである。自閉症の子どもは、声の大きさを調整できないと言われるが、そうではなく、人へ届けよう、他者を意識しようという気持ちが弱いのである。だから、人に声を届ける練習が必要である。自閉症の子の課題を、クラス全体で取り組んでいる。

3. 周囲の子どもを育てる。そして、「自立」と「依存」。

何を書いたらよいか分からなかった子が、友だちのを見て、「こんなを書けばいいんだ。」と納得していた。先生の話だけでは、ぴんと来なくても仲間の動きを見て、ピンと理解できることがある。つまり、仲間に分からないところを聞ける授業、分からないところを教える授業、穏やかな依存関係が育っている授業を目指したい。発達に課題のある子どもには、「自立」することを強調してきているが、上手に人に頼る「依存」を教えることが大切である。「依存」を教えるには、「依存」した時の成功体験を積む必要がある。そのような成功体験を積める集団に育てよう。

4. 発達に課題のある子どもに最も大切なのは、“ことばを育てる”ということ。

発達に課題のある子どもに最も大切なのは、“ことばを育てる”ということである。“キレる子”というのは、行動がキレる前に、ことばがキレている。ことばが足りない時にストレスを抱えるのである。もっていることばの分だけ、世界が豊かに見えてくるものだ。子どもたちは、いっぱいことばにさらされているが、刺激の強いことばしか入ってこない。他のことばは、授業という非日常場面で丁寧に教えたい。子どもは、子どものことばから、最もよく学ぶので、言語環境をリードする子どもの役割は大切である。そして、仲間のことばを聞いて、「ああ、そうか。」と納得し、語りなおすことでことばが育っていく。「〇〇さんと同じです。」ではなく、必ず自分のことばで言いなおすようにさせたい。そして、書いてあることが、頭の中で絵になり、自分の体験と重ね合わせることができるようになっていきたい。

5. 授業改善のキーワード

①子どもと教材をつなぐ。

②子どもと子どもをつなぐ。

③自分と自分をつなぐ。(さっきまで～と思っていたけど、今は、～と思う。)

子どもと子どもをつなぐためには、媒介が必要である。授業でいう媒介とは、学ぶ値打ちのある「教材」「課題」である。子どもと値打ちのある「教材」「課題」をつないだ上で、子どもと子どもがつながるのである。

(文責：南河内LD研究会代表 河内長野市立小山田小学校 清水初穂)

